

行為と変化
——ドイツ語における他動性の拡張について——

大藪正彦

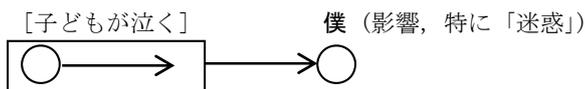
0. はじめに

0.1. 複合的事象の表現 (間接受動, 結果構文など)

各言語において, 複合的な事象が単文で表現されることがある。次の文は, 典型的な日本語の間接受動の例として, しばしば引き合いに出される表現である。

- (1) 僕は子どもに泣かれた。

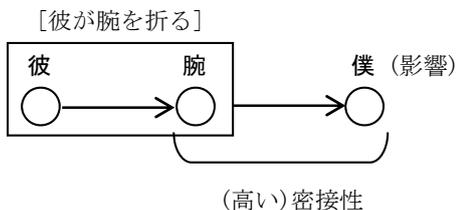
このタイプの受動文は被害受身と呼ばれることがあるが, ここで表わされている事象は, まず「子どもが泣いた」ということ, そしてそれによって主語「僕」が被害ないしは迷惑を被ったというものである。次の図1はこの状況を図式化したものである (丸い円は事象の参与者を, 四角の囲みはまとまりをなす一つの事象を表わしている。また, 実線の矢印はエネルギーの流れを示している)¹⁾。



【図1】

本稿との関連で興味深いのは, (1) の文に直接対応するドイツ語の表現が存在しないという点である。ただし, 次のような場合には, 日独両言語での表現が可能となる。

- (2) 僕は [彼に] 腕を折られた。
(3a) Er hat mir den Arm gebrochen.
b) Ich habe [von ihm] den Arm gebrochen bekommen/gekriegt. (口語的)



【図2】

(3) のドイツ語文では, a) 文の方が能動文, b) 文の方が受動文 (いわゆる bekommen 受動) による表現となっている。構造的に見て日本語の間接受動により近いのは, b) タイプの表現の方であると考えられるが, このタイプの受動文は一般に口語的であるとされる。ここでドイツ語の表現が可能であるのは, 折られたのが, 取りも直さず「僕」の「腕」だからである。つまり, 「僕」と「腕」が極めて密接な関係——この場合は部分全体関係——にあるため, (1) で表わされていた状況に比べ, 「僕」に及ぶ影響がはるかに明確なものとなっている ((3a) タイプの構文については小川1991を, (3b) タイプの構文については大藪1996, 1997

をそれぞれ参照)。これを図式化したのが図 2 である。

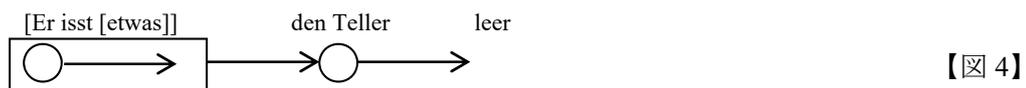
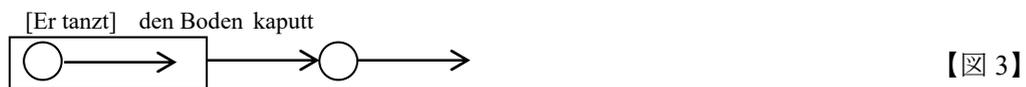
日独の各構文が、それぞれ意味的に厳密に対応するものであるのかという点にはもちろん十分注意を払う必要がある。例えば、上のドイツ語の各構文が、日本語の構文が表わすのと同じ程度に被害の意味を表わしているかという点と、おそらくそうではないと思われる。また、両構文の実際の用いられ方——つまり日独の各話者にとってどの程度好んで用いられるか——に関して、特に (2) と (3b) の間には、大きな隔たりがありそうだとすることが、直観的にも十分感じ取られる。そのような点も踏まえた上で、差し当たり現時点で確認しておきたいのは、日独両言語に平行した構造が存在するという点、ただしこの構造が適用される範囲については——この場合、日本語の方が適用範囲が広いという点で——両言語間に明確な差異が認められるということである。

さて、複合的な事象を表わす別のタイプの表現として次のような結果構文がある。

(4) Er hat den Boden kaputt getanzt.

(5) Er hat den Teller leer gegessen.

これらの文で特徴的なのは、den Boden, den Teller などの目的語が、それぞれ tanzen, essen という動詞が通常意味的に要求する種類のものではない——これらの目的語が擬似目的語 (fake object) と呼ばれることがあることも参照——という点である。ここで表わされている状況は、まずある行為が行われたということ、そしてそれによりある対象に変化が生じたということである。次のように図式化できるだろう (一番右側の実線の矢印は、対象に特定の方向への変化が生じたことを示している)。



すぐに気づく通り、いずれの文も日本語に直訳できないという点で、上の (1) における状況と対照的である。ただし、ここでも一定の範囲内であれば、日独両言語での表現が可能である。

(6) Er hat den Tisch sauber gewischt.

(7) 彼はテーブルをきれいに拭いた。



ここでの目的語 den Tisch, 「テーブル」は、それぞれ動詞 wischen, 「拭く」が通常意味的に要求する種類の目的語である。また、結果状態を表わす結果述語 sauber, 「きれいに」は、当該

の動詞行為が遂行され、そしてその結果ある変化が生じるとするならば、通常予測される特定の結果状態を示している（この点については後に再び取り上げる）。ここでも上と同じような状況が確認できる。すなわち、日独両言語に平行した構造が存在するという点、ただしこの構造の適用できる範囲については——今度はドイツ語の方が適用範囲が広いという点で——両言語間に明確な差異が認められるということである。また、ここで取り上げた二つのタイプの構文は、最初にも述べた通り、複合的な事象を表現するものである。つまり、「事象と事象」ないし「事象と参与者」の関係の捉え方に——少なくとも言語レベルにおいて——日独両言語間で差異が認められるということでもある。

0.2. 'Favourite Encoding Schema'

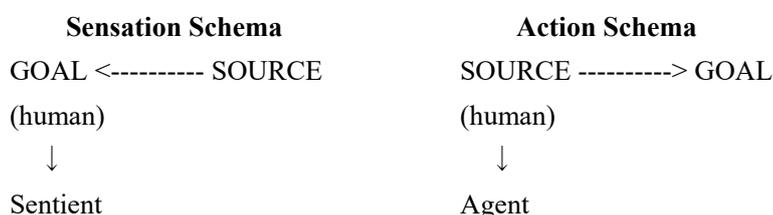
前節では、ある構文がどの程度まで拡張できるのか、すなわちどのような状況まで表わし得るのかという点に関して、日独両言語間で差異があるということを見た。大変大雑把ではあるが、次のように図式化できるだろう。



【図 6】

例えば、間接受動文であれば、日本語の方がドイツ語より適用範囲が広く（左の図）、結果構文であれば、ドイツ語の方が日本語より適用範囲が広い（右の図）。

以上の議論から生じる一つの疑問は、なぜそのような差異が生じているのかというものである。これには、例えば当該の構文が発展してきた歴史的な事情なども考えられようが、ここでは、池上の言う 'favourite encoding schema of the speakers of the language in question' (Ikegami 2000: 2.3; 池上 1999- も参照) という観点からの説明の可能性を指摘しておきたい。問題となっている各構文を考える際に有効であると思われるのは、Ikegami (1994, 2000) で言及されている二つの対照的なスキーマ、「感覚のスキーマ」(sensation schema) と「行為のスキーマ」(action schema) である。



(Ikegami 2000: 2.4)

それぞれのスキーマは、「感受者」(sentient)——受身的に他からの刺激を感じ取って内在化する存在——としての人間、及び「動作主」(agent)——積極的に他者に働きかけ、影響し、変化させる存在——としての人間という、人間存在の二つの基本的な様相を捉えている (池上 2000: 206, 319f.)。

ここで重要なのは、どちらのスキーマに依拠した言語化がより好んで行われるのかとい

う点に関して、言語間で差異が認められるのではないかということである。以上の議論との関連で言えば、相対的に間接受動がより広範に用いられる日本語では感覚のスキーマが、一方結果構文がより広範に用いられるドイツ語では行為のスキーマが、それぞれの言語を特徴づけるより優勢なスキーマとして有効に機能しているのではないかと推測することが許されよう。

以上のような展望を踏まえつつ、以下では、ドイツ語における他動性の拡張という現象に的を絞って考察を進めていきたい。具体的には、(1) ドイツ語の結果構文を主な対象としながら、ドイツ語の行為動詞に見られる他動性の変動の幅を確認する、(2) 結果構文と他の構文の関連性を確認する、(3) 結果構文に特徴的な現象とドイツ語の他の領域に見られる現象の関連性を確認する、という三点が本稿の目的である。

1. 結果構文の意味

先にも触れたが、日本語との対比で興味深いのは、次のようなタイプの構文である。

(8)a) Er tanzte den Boden kaputt. (Rapp 1997: 112)

b) *彼は床をボロボロに踊った。

(9)a) Er streichelte die Katze schläfrig. (Rapp 1997: 106)

b) *彼は猫を眠たくなでた。

(8) では、本来自動詞である *tanzen* が特定の構文で用いられることにより他動詞化され、さらに「*kaputt* の状態にする」という形で使役的な意味を担わされている。(9) の *streicheln* は確かに他動詞として用いられることもあるが、その本来的な用法では使役的な意味を有するものではない。それがここでは、(8) と同様、「*schläfrig* の状態にする」というように事実上使役動詞化されて用いられている。いずれの場合も、本来他動性の低い動詞が、特定の構文に現われることにより、その他動性が拡張されていると見なすことができる。そこでまず、ドイツ語において観察されるこのタイプの構文が、どのような形でドイツ語に定着しているのかを見ていきたい。なお、本稿で考察の対象とするのは、最も一般的に結果構文と呼ばれているもののうち²⁾、他動詞構文タイプのもの、すなわち、

(10) NP₁ V NP₂ AP/PP

という構造を持ち、同時に、形容詞句 (AP) または前置詞句 (PP) が NP₂ の結果状態を表わすタイプのものである (自動詞構文タイプの結果構文——*Der Boden ist knochenhart gefroren* など——は本稿では取り上げない)。また、結果構文における形容詞句・前置詞句をまとめて結果述語と呼ぶことにする。

このタイプの構文は、ドイツ語においてとりわけ特殊な構文であるという印象は受けない。次のような文は、ドイツ語においてしばしば見受けられる表現であると言ってよいだろう (以下、例文中の下線はすべて大菌による)。

- (11) Sie hüllte mich von hinten in das Tuch, von Kopf bis Fuß, und rieb mich trocken. (Bernhard Schlink, Der Vorleser, 26)³⁾
- (12) Zwei Kampfhunde haben einen sechsjährigen Jungen auf einem Schulgelände in Hamburg angefallen und totgebissen⁴⁾. (Deutsche Welle Nachrichten 26.06.00)

結果構文の意味についてももう少し詳しく見ておきたい。次の文から出発することにする。

- (13)a) Sie hat ihn [auf]geweckt/wach gemacht.



【図 7】

動詞 [auf]wecken または wach machen による文である。主語 sie が目的語 ihn に働きかけ、特定の——ここでは「目覚めた状態になる」という——状態変化を引き起こしたことを表わしている。特徴的なのは、「彼を目覚めさせた」ということは述べられているが⁵⁾、「どのようにして目覚めさせたのか」という行為の様態——すなわち、呼びかけて起こしたのか、揺すって起こしたのか、あるいは叩いて起こしたのか——については語彙的には特に指定されていないということである。これを図式化したものが図 7 である (左側の円は行為の出発点である行為者、右側の円はその行為の向けられる対象をそれぞれ示している。働きかけ部分を示す矢印が破線になっているのは、その部分が語彙的に詳しく指定されていないことを示している。それに対し、太い実線による右側の矢印は、対象に生じる変化が語彙的に指定されていることを示している)。

一方、動詞 rütteln による次の文は、上の状況と対照的である。

- (13)b) Sie hat ihn [an der Schulter] gerüttelt.



【図 8】

主語 sie が目的語 ihn を揺すったという働きかけの部分は語彙的に指定されているが (太い実線の矢印部分)、それによりどのような変化が生じたのかという結果については特に指定がない (破線による矢印部分)。

すぐに気づく通り、働きかけの部分と結果部分の両方を表わす表現形式が次のような行為動詞による結果構文である⁶⁾。

- (13)c) Sie hat ihn wach gerüttelt.



【図 9】

ドイツ語の結果構文の機能として、このように、行為の様態と行為による結果状態の両方を、単一文内で同時に表現することができるという点が挙げられる。ただし、行為の様態がどの程度詳しく指定されるのかという点については、動詞によって異なり得るということも指

摘しておきたい (例えば、極端な場合として *wach rütteln* と *wach machen* のような対立を参照)。

2. 結果構文の意味的展開

2.1. 行為と状態変化

以下では、結果構文をその基礎動詞の他動性の軸に沿って見ていくことにする。一方の極として、(i) 比較的純粋に行為動詞であるもの、そして他方の極として、(ii) 行為による結果を含意するものを立てるが、その途中の各段階は連続的なものであることに注意しておきたい⁷⁾。

(i) 比較的純粋に行為動詞であるもの

(14) *Er streichelte die Katze schläfrig.*

(15) *Sie schlug ihn tot.*

結果述語の意味内容を動詞の意味から予測することは不可能である。つまり、結果述語は動詞の意味から独立している⁸⁾。すでに見た通り、この段階では日本語の結果構文は不可能である (例えば「*猫を眠たくなでる」など。ただし (15) のような事例については「叩き殺す」という複合動詞を用いれば表現可能である⁹⁾。

最も極端な場合、本来自動詞であるもの、従って他者に直接影響を及ぼすということすらないようなものが、この構文に現れる。

(16) *Ich habe mich ganz heiser gesungen.* (*私は喉をガラガラに歌った。)

(17) *Wir haben uns müde getanzt.* (*私たちは[自分たちを]クタクタに踊った。)

このタイプの結果構文に関しては、西村 (1998) が英語の結果構文に関して述べていることがそのまま妥当すると考えられる。すなわち、「通常は対象の存在を含意しない行為を表す動詞が結果構文に生じうるのは、その行為が (行為者本人を含む) 誰かあるいは何かに影響を及ぼすような、まさに通常とは異なる (激しく、極端に、などの) 仕方で遂行されると考えられる場合、言わば、その動詞の意味が〈使役行為〉を表すように拡張される場合にほかならない」(西村 1998: 181) というものである。

実際に、自動詞による結果構文には誇張表現が多く見受けられ¹⁰⁾、しかも (18) に見るようにイディオム化しているものが多い。(19) は雑誌からの実例で、「(トークショーで) 話し過ぎて ‘leer’ になってしまった」という誇張表現である。

(18) *sich totärgern, sich totlachen, jn. unter den Tisch trinken, jn. an die Wand spielen ...*

(19) *Die reichste Talkmasterin der Welt: „Ich habe mich LEERgeredet.“ (marie claire 4/99: 86)*

ところで、自動詞による (16) 以下の例では、目的語としてしばしば再帰代名詞が用いられている点が目を引く。これについても、西村 (1998) が英語の結果構文に関して指摘して

いることがそのまま妥当するだろう。すなわち、これらの例で「目的語が事実上再帰代名詞に限られるのは、それぞれの述語動詞の表す行為が激しくあるいは極端な仕方で行われた結果、その行為者以外が結果述語の指定する変化を被るとは想像しにくいからである」(西村1998:181)と考えられる。例えば、「私」が大声を張り上げた結果、誰か他の者の声がかれるというのは想像しにくい¹¹⁾。主に再帰代名詞とともに用いられるタイプの動詞には次のようなものがある。

- (20) sich krank arbeiten, sich schlank hungern, sich gesund schlafen, sich heiser singen,
sich müde laufen, sich heiß tanzen ...

ただし、これまでもいくつか見た通り、行為者以外の目的語が立つ場合もある。十分予想できることであるが、それらは当該の行為による影響を被りやすいもの、例えば行為者の身体部位、行為者が直接身につけているもの、あるいは行為者が直接的に接しているものなどである。

- (21) Er lief sich die Füße wund.
(22) Sie lief ihre Schuhe kaputt. (Rapp 1997: 112)
(23) Die Jogger laufen den Rasen platt. (Kaufmann 1995: 146)
(24) Die Betrunkenen sangen uns wach. (Nogami 2000: 61)

最後の(24)の例では近辺にいる人が目的語となっている。また(18)の後者二例に見られるように、ドイツ語においては、ある行為において他者を凌駕するという意味合いの結果構文が生産的であり(Zifonun u.a. 1997: 1115を参照)、その場合も他者が目的語に立つ。

また、次に見るように、行為と変化の間の因果関係が常識的な場合は語彙化されていることが多いようである¹²⁾。

- (25) totschiessen (erschlagen), totstechen (erstechen), totschießen (erschießen), ...

一方で、この段階の結果構文は、臨時的なその場限りの用法へと連続的につながっていると考えられる。特に行為と変化の間の因果関係が常識的でないような場合は、文体的効果を伴うことになる。この種の結果構文は、広告や雑誌などでしばしば見受けられる¹³⁾。

- (26) Essen Sie sich jung. Klingt verführerisch und fast zu schön, um wahr zu sein. Aber: Es funktioniert. Eine ausgewogene Ernährung sorgt für Wohlbefinden, Gesundheit und Energie. (ELLE Sep. 2000: 368)
(27) Heute sehe ich ganz klar: Ich habe mich dick gehungert. Ohne die Diäten wäre alles im grünen Bereich geblieben. (SHAPE 2/2000: 21)
(28) [...] er glaube kaum, dass es gelinge, Präsident Slobodan Milosevic müde zu bomben. (Deutsche Welle Nachrichten 08.04.99)

(ii) 行為による結果を含意するもの

(29) Er hat den Tisch sauber gewischt. (彼はテーブルをきれいに拭いた。)

(30) Er hat die Schuhe blank geputzt. (彼は靴をぴかぴかに磨いた。)

結果述語が動詞の意味から完全には独立していない¹⁴⁾。この段階から日本語でも結果構文が可能となる。上例の場合、動詞は目的語の状態変化を必ずしも含意しないが、「変化の方向性」までは含意しており、仮に状態変化が起こるなら、ある特定の方向に変化するという含みがある(鷲尾 1997 を参照)。次の例では、これからさらに一歩進み、動詞が特定の状態変化を明確に含意している。

(31) Sie hat ihr Haar blond gefärbt. (彼女は髪をブロンドに染めた。)

(32) Er brach die Vase in Stücke. (彼は花瓶を粉々に割った。)

動詞自体が「使役動詞」寄りであり、結果述語は動詞がすでに含意している結果状態をさらに特定化している¹⁵⁾。

この段階になると結果述語に前置詞句が多くなることも特徴的である(Kaufmann 1995, Kaufmann/Wunderlich 1998)。これは、一つにはこの段階における形容詞句が——特に英語と比べると——余剰的に感じられるということがある。例えば‘die Milch zu einem Block/*hart frieren’(Kaufmann 1995: 146)などの表現は、ドイツ語話者にとって、ある対象を‘frieren’すれば‘hart’になるのは当然ではないか、という感じで受け止められるようである¹⁶⁾。一方で、前置詞句が用いられると、「方向」という側面が明示化され、それにより結果状態をより詳しく指定しているということが明確になるのだと考えられる(同様に Kaufmann 1995, Kaufmann/Wunderlich 1998 を参照)。結果状態を一義的に指定するような使役動詞になると、結果状態の表示は明らかに困難になる。次の例が分かりやすい。

(33) *Er ermordete die Frau tot. (Rapp 1997: 108)

この例では結果述語は明らかに余剰的であるが、そうでないような場合でも、結果状態の表示はドイツ語ではやはり困難である。

(34) *Der Zauberer hypnotisiert das Publikum ruhig. (Kaufmann 1995: 142)

(35) *Der Bär erschreckt die Wanderer sprachlos. (Kaufmann 1995: 142)

これらの例における動詞は、行為そのものより、相手に生じた心理的な状態の方に重点がある¹⁷⁾。なお、Kaufmann (1995: 142)によれば、英語では(34), (35)に相当するが可能である。その場合、異なるレベルでいわば二重の使役化が生じているということになり、英語では使役化に関する可能性がドイツ語よりもさらに広がりを見せているということになる(池上 1980-81: 6.5 も参照)。

また、行為の様態が極めて希薄化した段階になると、「物」主語が出現するようになる。

- (36) Gele Shampoo macht das Haar leicht kämmbar. (広告)
 (37) Mehr als 300 Lastwagen, Taxen und Busse haben mit einer Demonstration gegen die hohen Kraftstoffpreise die Innenstadt lahm gelegt. (Deutsche Welle Nachrichten 09.09.00)

一方、典型的な行為動詞による結果構文では、特に「出来事」などの抽象的な主語は——そもそも行為という概念とは相容れないわけであるから——事実上現われ得ないことになる。

2.2. 行為と移動

以下では、他構文との関連性を見ていく。まず取り上げたいのは、次のような目的語交替を示す一連の行為動詞である。

- (38)a) Er wischte den Tisch [sauber].
 b) Er wischte die Krümel vom Tisch. (Vgl. *Er wischte die Krümel.)
 類例：scheuern, waschen, fegen ...

このタイプの動詞は、a) 文が示すように、基本的にはある対象に働きかけることを表わすものであるが、特に「対象 (場所) からある物 (付着物) を 移動させる」ことが含意されている。a) 文の表わす行為と b) 文の表わす行為の間には、前者を実行するためには必ず後者が行われる必要があり、一方、後者が行われれば通常前者も行なわれることになるという、いわば「前提・必然的結果」の関係 (メトニミー的關係) が成立している (Zaima 1987 を参照)。両者は、事象のどの側面を焦点化するのかという点で異なっているということが言える。

なお、対象を移動させることを表わす b) 文の *wischen* は使役動詞化されており、ここでも行為動詞の他動性の拡張という現象が確認できる。行為動詞をそのまま用いた b) タイプの表現は日本語に直訳できず (「??パンくずをテーブルから拭く」)、ここでも日本語とは対照的である。

必ずしも物の移動を含意しない接触・打撃を表わす行為動詞 (*schlagen, schütteln* など) が、使役的移動を表わす表現に用いられる場合がある。次の各例の b) 文である。

- (39)a) Sie schlägt ihn [mit dem Stock].
 b) Sie schlägt ihm das Messer aus der Hand.
 (40)a) Er schüttelt den Baum.
 b) Er schüttelt die Äpfel vom Baum.

これらが上のタイプと異なるのは、a) 文の行為と b) 文の行為に必ずしも「前提・必然的結果」の関係が成立していない点である。しかしながら、b) 文が表わす事象は、対象に付着——あるいはそこに存在——している物を移動させるというものであり、この点で「ある対象 (場所) からある物 (付着物) を 移動させる」という上の b) 文タイプと重なりがある。しかも、これらの動詞が接触・打撃を表わすということを考えてみれば明らかな通り、動詞

が表わす行為と対象の移動との間には、因果関係が成立しやすい状況になっている。つまり、以上のタイプの行為動詞は、基本的には「ある対象 (場所) に働きかける」ということを表わすものであるが、その働きかけにより、常にある物の移動が起こる、あるいは起こりやすいという状況がある。そのために、焦点の変更を伴った使役的移動表現が可能になっているのだと考えられる。

このように考えてくると、可能性としてはその逆の方向での焦点の変更もあり得るのではないかということになる。つまり、「ある対象 (移動物) をある場所から・へ移動させる」ということを含意する行為動詞において、これまでとは逆方向の焦点の変更が生じる場合である。具体的には次のような状況になろう。

(41)a) Er schob den Wagen [aus der Halle].

b) Er schob die Halle leer. (Rapp 1997: 108) (Vgl. *Er schob die Halle.)

(41b) の文は、おそらくあまり自然な表現ではないという印象を受けるのではないだろうか。Rapp 自身も、この表現は文脈や状況からホールに何があったのかということが明確な場合でなければ使われないであろうと述べている (Rapp 1997: 110)。すなわち、事象に関与している項が、実際に実現されているか (上例 (38b), (39b), (40b)), あるいは少なくともコンテキストから明確でなければ、この種の交替は成立しにくいということである。

以上、前節では「行為」と対象の「状態変化」が因果関係のうちに捉えられることを、そして本節では「行為」と対象の「移動」が因果関係のうちに捉えられることを見てきたことになる。本節の締めくくりとして、状態変化を表わす結果構文と、物理的移動を表わす使役的移動表現の間に見られる連続性を確認しておきたい。

まず、同じような状況を表わすのに、形容詞句と前置詞句の両者が用いられる場合がある。

(42) Er trinkt sich tot/zu Tode.

(43) Er schlägt Eiweiß steif/zu Schnee.

これらの例では前置詞句が表わすのはある種の「状態」であるが、次の例では——抽象度の違いはあるものの——ある種の「場所」になっている。

(44)a) Jürgen Klinsmann jubelte sich in die Herzen der Fußballfans.

b) Jürgen Klinsmann jubelte sich auf die Titelseiten der Sportzeitungen.

c) Jürgen Klinsmann jubelte sich in die Umkleidekabine/auf die Tribüne/vom Spielfeld.

(Maienborn 1994: 242)

a) 文, b) 文は, Klinsmann が 'jubeln' した結果, それぞれ「サッカーファンのハート」, 「スポーツ紙の一面」に至ったということを表わしているが, もちろん Klinsmann がそこへ物理的に移動しているということではない (蛇足ながら, Klinsmann は元ドイツ代表のサッカー選手で, ゴールを決めた後に歓喜する姿が印象的だった選手である)。興味深いのは c) 文である。まず, この文では Klinsmann が最終的に「ロッカールーム」や「スタンド」, あ

るいは「フィールドの外」へ至ったことが表わされているのは明らかである。ただし、Maienborn (1994: 243) によれば、この文では、‘jubeln’ という行為とそれぞれの場所への移動の間の因果関係が示されるだけであって、Klinsmann が ‘jubeln’ しながらそれらの場所へ移動したということは決して表わさないとのことである（細かい経緯——例えば、喜び過ぎたために審判から退場処分を受けたのか、あるいは練習中ふざけ過ぎたために監督から次の試合の出場を禁じられたのか——については、コンテキストなり聞き手の知識なりによって補われる必要がある）。これは、比較的純粹に行為のみを表わす動詞が結果構文で用いられ、しかも前置詞句による結果述語部分が具体的な場所になっている事例である。

ただし、当該の動詞行為が移動経路の途中でも行われているのが普通であるような状況では、結果構文の読みに、微妙に移動の意味合いが重なってくるように思われる。

(45) Der Wurm frisst sich ins Holz.

(46) Er bettelt sich durchs Land. (Kunze 1995: 21, Oya 1999: 357)

動詞が、ある種の「運動」を表わすものになると、この状況はいつそう明白である。

(47) Er schleicht [sich] aus dem Zimmer. (Kunze 1995: 23)

(48)a) Er tanzt sich durch die Menschenmenge. (Oya 1999: 357)

b) Er tanzt in den Saal.

上例が示す通り、この段階では sich の現われない表現も可能である。Oya (1999) によれば、典型的には「客体化された自己」が意識されるような場合——例えば、移動がある種の困難さを伴うような場合など——に sich が用いられるということである。この辺りの微妙な領域を介し、一方で場所の前置詞句を伴う結果構文が、一方で自動詞構文による移動表現が存在しているのだと考えられる。

3. 関連現象——結びに代えて——

最後に、行為動詞の他動性の拡張という観点から、関連のあると思われる現象をいくつか見ておきたい。結果構文をめぐる現象が、冒頭で述べたように、仮にドイツ語を広く特徴づけるような何らかの傾向性を反映するものであるとするならば、これと平行するような現象がドイツ語の他の部分でも見られるのではないかと——ここではそういう認識に基づいている。まず次の例では行為動詞といわゆる被成目的語の結び付きが問題となっている。

(49)a) Er hat im Garten ein Loch gegraben.

b) Er hat sich [mit der Zigarette] ein Loch in den Mantel gebrannt.

(50)a) 彼は庭に穴を掘った。

b) *彼は [煙草の火で] コートに穴を焦がした。 (Washio 1997: 46 を参照)

ドイツ語では動詞 brennen が被成目的語 ein Loch を取り得るのに対し、日本語の「焦がす」はそうではない。これは、対象への働きかけを表わす動詞が、本来の目的語の代わりに被成

目的語と結び付いているというタイプである (類例として *eine Eisbahn spritzen* など)。ドイツ語ではさらに、本来自動詞であるものが被成目的語と結び付くこともある (*Blut husten*, *Tränen lachen* など)。いずれの場合も日本語には直訳不可能であることと照らし合わせると、ここでも結果構文の場合と同様の——ドイツ語では行為動詞がその他動性を拡張させた形で用いられているという——状況が確認できる (英語との対照的な観点から日本語に言及しているものとして影山 1996, Washio 1997 も参照)。

次は、移動表現の例である。

(51)a) *Er ist ans andere Ufer geschwommen.*

b)??彼は向こう岸へ泳いだ。

(52)a) *Er ist in den Saal getanzt.*

b) *彼はホールの中へ踊った。

(51a), (52a) の文はドイツ語の表現としてごく自然なものであるが、しばしば指摘されている通り、(51b), (52b) の日本語の表現はぎこちないものと感じられる。これらの表現を自然なものにするためには、例えば「泳いで行く」、「踊りながら行く」のように方向性を含んだ動詞とともに用いる必要がある。運動を表わす動詞が、日本語では「行為」を表わすレベルにとどまっているのに対し、ドイツ語では「行為」だけではなく「移動」をも表わすことができるということである。結果構文との関連性については、次のように抽象化したレベルで捉え直すことができるだろう。つまり、行為における結果の達成が対象の状態変化を引き起こすことであるとするならば、移動における結果の達成は特定の場所への到達であると考えることができる。そう考えてよいならば、いずれの場合も、ドイツ語において、より結果志向的な方向での行為動詞の意味拡張が見られるということである (この点については対照的な観点から日英語の現象を扱っている Ikegami 1985 を参照)。

以上は、行為動詞の意味拡張が他の構文でも見られるというものであった。今度はドイツ語の行為動詞に見られる現象とドイツ語の他の領域に認められる現象の相関関係に目を向けてみたい。ここでは、Ikegami (1985) において日本語と英語の間に指摘されている状況を、ドイツ語と日本語との間で簡単に確認してみたいと思う。

まず一点目は、主語・目的語表示の義務性の問題である。主語や目的語が表示されない場合の効果を考えてみると、まず目的語に関しては、「対象へ向けられた行為」という側面が背景に退くことになる。その結果、行為そのものに焦点が当たりやすくなり、もちろん行為の結果には焦点が当たりにくくなる。一方、主語についても、それが表示されなければ、対象に対し働きかけ、影響力を行使する存在——すなわち動作主——が背景に退くということになり、同様の効果もたらされる。言うまでもなく、目的語の存在や動作主の存在は、動詞の他動性と相関関係にあるとされる要因である (Hopper/Thompson 1980)。一般にドイツ語の方が、日本語よりも、主語や目的語の表示は義務的であるから、ドイツ語の行為動詞の方が、他動性を拡張し、使役動詞化して用いられやすいというのは、特に不自然な状況ではないということになる。

二点目は、行為表現における「物」主語の立ちやすさの問題である。行為表現において「人」主語が立つ場合には、当然行為自体にも焦点が当たりやすいのに対し、「物」主語が立つ場

合は——以前にも触れた通り、行為という概念とは本来相容れないわけであるから——「結果の達成」が際立つ傾向にあると考えてよいだろう。ドイツ語では日本語に比べ「物」主語が立ちやすい傾向にある——例えば *Sein Verhalten ärgerte mich* タイプの言い回しを参照——ということを見ると、他動性の拡張という現象がドイツ語の方により顕著に見られるという状況は、特に不自然なものではないということになる。

三点目は、名詞句の定・不定表示の問題である。一般に目的語の個性も動詞の他動性と相関関係にあるとされる (Hopper/Thompson 1980)。目的語が明確な輪郭を持たない場合、当然それに及ぶ影響の程度はあいまいになり、従って目的語に生じる変化に焦点は当たりにくい。名詞句の定・不定表示に関して言えば、明らかにドイツ語の方が義務的であり、日本語は義務的でない——従って常に不定の意味で解釈される可能性を有している——わけであるから、ここでもやはり、ドイツ語において他動性の拡張が顕著であるということをサポートするような状況になっている。

最後にもう一点指摘しておきたいのは、本稿で取り上げた現象が、特定の構文という枠組みの中で生じているということである。Zaima (1987, 1999), 成田 (2000) などが指摘するように、ドイツ語においては、統語構造が特定の意味機能を担っているという傾向が認められる。そのことを考慮するならば、ドイツ語の行為動詞に見られる他動性の拡張は、いわば構文に支えられる形で生じているのだという指摘も可能である。成田 (2000) は、この点を捉えドイツ語の動詞は「柔軟性」が高いと述べている。

以上の議論から言えることは、言語内の異なった領域に見られる現象が、有機的に関連し合いながら、ある特定の現象——この場合は行為動詞の他動性の拡張——を動機づけているらしいということである。今後このような方向での研究が進み、さらに広範囲の現象を全般的に特徴づけているようなある種の原理ないし傾向性が捉えられれば、各種言語現象について一歩進んだ形の説明を与えるものになるということはあるまい。

注

- 1) 谷口 (2000) も参照。ただし本稿における図は、特にテクニカルな意味合いで用いているわけではないので、谷口のものに比べ簡略化したものになっている。
- 2) 「結果構文」(Resultativkonstruktion) と言っても、実際には研究者によって、どの辺りまでを含めるかという点でばらつきが見られる (Washio 1997: 6 も参照)。
- 3) この文も日本語に直訳することは不可能である。邦訳では次のように処理されている。

ぼくの頭から足まで、彼女は後ろからタオルですっぼりくるむと、こすって拭いてくれた。(松永美穂訳『朗読者』24頁)
- 4) ここでは、形容詞 *tot* が前綴り化されている。
- 5) ただし、動詞[句]が明確に結果の達成を含意するかどうかという点については、各事例において微妙に異なり得る。堀口 (1981) によると、*wecken, aufwecken, wach machen* では、後者ほど結果達成の含意の度合いは高くなる。なお、本稿の定義に従えば、*jn. wach machen* は結果構文に含まれるが、*jn. aufweckeh* は、前綴り *auf-* を副詞と見なすならば、典型的な結果構文はずれることになる。
- 6) *erschlagen* や *erstechen* のように単一の動詞で行為と結果の両方を表わす場合もある。
- 7) 以下の分析は池上 (1980-81: 6.5) を出発点としている。

- 8) 鷺尾の言ういわゆる「強い」結果構文である。

Resultatives in which the meaning of the verb and the meaning of the adjectives are completely independent of each other [...] will be referred as **STRONG** resultatives. In resultatives of this type, it is impossible to predict from the semantics of the verb what kind of state the patient comes to be in as a result of the action named by the verb. Let us call resultatives that are not “strong” in the above sense **WEAK** resultatives (Washio 1997: 7f.).

- 9) 影山 (1996), Washio (1997), 鷺尾 (1997) などを参照。

- 10) 同じく西村による次の指摘も参照。

「動詞の表す行為と通常ならそのような行為からは生じえないような事態との間に因果関係を設定することによって、その行為の特異性ないし異常性を際立たせている」(西村 2000: 159)。

- 11) ただし、西村 (1998: 201f.) が英語に関して指摘している通り、特定の状況を想定すれば、*jemanden heiser schreien* という表現も可能になると考えられる。例えば、子どもたちの間でできるだけ長く声を張り上げることを競うゲームが流行しているという状況である。

A: Ich kann Hans leicht heiser schreien, aber nicht Anna. Sie hat wirklich eine gute Lunge.

B: Genau! Ich glaube, niemand kann sie heiser schreien.

- 12) 語彙化されているとは言えないものの、料理行為を表わす動詞は結果述語とともに用いられることが多い。これは、料理における行為が常に特定の目的と結び付いているからだと考えられる。以下はいずれも実際のレシピからの引用である。

(a) Puddingpulver [...] mit mind. 6 EL von 1/2 l kalter Milch glattrühren.

(b) 250 ml Sahne steif schlagen.

- 13) Rapp (1997) の取り上げている、一見奇異な印象を受ける表現 *die Katze grün streicheln* も、この段階のものである点に注意しておくといえよう。動詞が行為のみを表わし、結果状態を特に指定していないということは、行為と結果述語との間に比較的自由に因果関係を作り出すことができるということでもある。

Seine Hände waren mit Farbe beschmiert. Zuerst bekleckste er den Teppich, dann streichelte er die Katze grün. (Rapp 1997: 107)

- 14) 鷺尾の言う「弱い」結果構文。注 8) を参照。

- 15) 結果状態を特定化しないような結果述語が可能性としてまったく排除されるわけではない。

Das Wischtuch war ganz schmutzig, aber ich habe es nicht bemerkt: Ich habe zwar den Tisch schmutzig gewischt.

ただし、これはかなり作為的な例であるという印象を受けるし、この種の結果構文が実際にどの程度用いられているのかという点になるとやはり疑問である。

- 16) 従って、結果状態をより詳しく指定するような形容詞——例えば *steinhart* や *knochenhart*——を用いればもちろん容認度は上がる。

- 17) 例えば、状況として十分にあり得そうな他の形容詞に変えても事情は変わらない。

(a) *Der Bär erschreckt die Wanderer tot.

結果述語を次のように *zu Tode* という前置詞句に変えると容認される。ただし、この場合の *zu Tode* は慣用的な表現であり、副詞に近い機能 (ほぼ *sehr* の意) を帯びている。

(b) Der Bär erschreckt die Wanderer zu Tode.

参考文献

- Hopper, Paul J./Thompson, Sandra A. (1980): 'Transitivity in Grammar and Discourse.' *Language* 56, 251-299.
- 堀口里志 (1981): 「形容詞派生の他動詞の結果性について」 『Der Keim』 5, 66-81.
- 池上嘉彦 (1980-81): 「'Activity'-'Accomplishment'-'Achievement'——動詞意味構造の類型」 『英語青年』 12 月号-3 月号.
- Ikegami, Yoshihiko (1985): "'Activity'"-"Accomplishment"-"Achievement". A Language That Can't Say "I burned it, but it didn't burn" and One That Can.' In: Makkai, Adam/Melby, Alan K. (eds.): *Linguistics and Philosophy: Essays in Honor of Rulon S. Wells*. Amsterdam: Benjamins, 265-304
- Ikegami, Yoshihiko (1994): 'The Agent and the Sentient: A Dissymmetry in Linguistic and Cultural Encoding.' In: Nöth, Winfried (ed.): *Origins of Semiosis*. Berlin: Mouton de Gruyter, 325-337.
- 池上嘉彦 (1999-): 「'Bounded' vs. 'Unbounded' と 'Cross-category Harmony'」 『英語青年』 4 月号-.
- Ikegami, Yoshihiko (2000): 'Cognitive Linguistics at the Edge of Chaos, or the Edge of Chaos called Cognitive Linguistics – Life, Language and Culture as Semiotic Processes.' (日本認知言語学会創立記念大会ハンドアウト)
- 池上嘉彦 (2000): 『「日本語論」への招待』 講談社.
- 影山太郎 (1996): 『動詞意味論』 くろしお出版.
- Kaufmann, Ingrid (1995): *Konzeptuelle Grundlagen semantischer Dekompositionsstrukturen. Die Kombinatorik lokaler Verben und prädikativer Komplemente*. Tübingen: Niemeyer.
- Kaufmann, Ingrid/Wunderlich, Dieter (1998): 'Cross-linguistic Patterns of Resultatives.' *Arbeiten des Sonderforschungsbereichs 282, Theorie des Lexikons Nr. 109*. Düsseldorf.
- Kunze, Jürgen (1995): 'Reflexive Konstruktionen im Deutschen.' *Zeitschrift für Sprachwissenschaft* 14 (1), 3-53.
- Maienborn, Claudia (1994): 'Kompakte Strukturen: Direktionale Präpositionalphrasen und nicht lokale Verben.' In: Felix, Sascha W. u.a. (Hg.): *Kognitive Linguistik. Repräsentation und Prozesse*. Opladen: Westdeutscher Verlag, 229-249.
- 成田 節 (2000): 「結合化と構文——日独対照の観点から」 (Ms.)
- 西村義樹 (1998): 「行為者と使役構文」 中右実/西村義樹『構文と事象現象』 研究社出版, 107-203.
- 西村義樹 (2000): 「対照研究への認知言語学的アプローチ」 坂原茂 (編)『認知言語学の発展』 ひつじ書房, 145-166.
- Nogami, Sanami (2000): *Resultativkonstruktionen im Deutschen und Japanischen*. Frankfurt a. M.: Peter Lang.
- 小川暁夫 (1991): 「3 格の実現について」 『ドイツ文学』 87, 119-130.
- Oya, Toshiaki (1999): 'Er bettelt sich durchs Land – eine one's way-Konstruktion im Deutschen?' *Deutsche Sprache* 27, 356-369.
- 大藪正彦 (1996): 「bekommen 受動をめぐる諸問題」 『Der Keim』 20, 61-76.
- 大藪正彦 (1997): 「bekommen 構文の意味的展開と bekommen 受動」 『ドイツ文学』 98, 84-95.
- Rapp, Irene (1997): *Partizipien und semantische Struktur. Zu passivischen Konstruktionen mit dem 3. Status*. Tübingen: Stauffenburg.
- 谷口一美 (2000): 「事態概念の拡張——日本語の被害受身文を中心に」 (日本認知言語学会創立記念大会ハンドアウト)
- Washio, Ryu-ichi (1997): 'Resultatives, Compositionality and Language Variation.' *Journal of East Asian Linguistics* 6, 1-49.

鷲尾龍一 (1997): 「他動性とヴォイスの体系」鷲尾龍一／三原健一『ヴォイスとアスペクト』研究社出版, 1-106.

Zaima, Susumu (1987): “Verbbedeutung” und syntaktische Struktur.’ *Deutsche Sprache* 15, 35-45.

Zaima, Susumu (1999): ‘Satzsemantik vs. Valenztheorie – Erforschung des Regelsystems der Satzbildung.’ In: Nitta, Haruo u.a. (Hg.): *Kontrastive Studien zur Beschreibung des Japanischen und des Deutschen*. München: Iudicium, 133-144.

Zifonun, Gisela u.a. (1997): *Grammatik der deutschen Sprache*. Bd. 2. Berlin: de Gruyter.

Masahiko OZONO:

Tätigkeit und Veränderung. Zur Erweiterung der Transitivität im Deutschen.

In: *Studies in Language and Culture. Memoirs of the Faculty of Law and Literature* (Shimane University) 10, 2000, 67-88.